

《追悼 泉館智寛講師》



故 泉館智寛講師

早い、あまりにも早すぎる別れ  
——泉館智寛さんを偲んで

高 島 秀 樹

明星大学人文学部兼任講師 泉館智寛さん、31歳、早い、あまりにも早すぎる別れであった。

泉館智寛さんは1972年2月、千葉県佐倉市に生まれ、地元の佐倉小学校に入学、小・中学校時代は父親の職業の関係で、大阪、広島、北海道と転校を重ねたが、地元に戻って佐倉中学校を卒業、県立佐倉高等学校を経て1990年4月、

明星大学人文学部社会学科に入学した。入学後、学部学生時代から君はきわめて真摯な学習態度を持ち、向学心に富む学生として教員間では高く評価されていた。私も、今は改装されてしまっていない11号館の講義室で、二三の学友と常に最前列に席を占めて熱心に、しかし教員の講義に対して鵜呑みにすることなく自ら考えながら聞いていることが良くわかる姿勢で「村落」

の講義を受講していた君の姿を鮮明に記憶している。社会学演習では山下淳志郎教授（当時、現名誉教授）のゼミに属し、君は学習・研究を重ねるとともに、中心となってゼミ雑誌を発行するなどの活躍をした。君は日本社会、さらには中国社会にまで及ぶ広い関心を持ち、学習・研究を進めていたが、卒業研究では日本の農村地域社会に焦点を定め、優秀な卒業論文『農村地域社会の可能性』をまとめて、1994年3月に卒業した。しかし、君の研究心はとどまるところを知らず、直ちに1994年4月、秋田大学大学院教育学研究科教科教育専攻修士課程に入学、松岡昌則教授の指導の下、農村地域社会、特に農家継承、後継者の問題についての研究を進めた。在学中、現地調査の一環として秋田県の農家に泊りこんで農業者からお話をうかがった経験を、「お酒に強くなった」といったエピソードも交えて後年君は楽しそうに語ってくれたことがあった。修士論文『農家継承の論理と地域農業構造』を完成させ、修士の学位を得て修了した君は、福永安祥教授（当時、現名誉教授）のご縁で1996年4月にはいわき明星大学人文学部に助手として就職、神山敬章助教授という良き先輩に恵まれたこともあってか、社会学科（当時、現現代社会学科）の社会調査実習を指導しながら、自らも福島県いわき市の各地域をフィールドに実証的な研究をきわめて精力的に進められた。君の熱心な研究態度とその成果が十分な水準に達したものであることは、第三セクターであるいわき未来づくりセンターの研究員を委嘱され、その研究成果の一部が自主研究報告書『農業の担い手に関する一考察』として刊行され、さらにそれが『いわきの未来を考える シリーズ1. 農業再生は可能か』に再録されたことから理解される。いわき明星大学の助手として研究と教育に活躍されていた君であったが、更なる向学心はとどまるところを知らず、

自ら職を辞して1999年4月には明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程に入学した。君は修士課程において農家継承、農家後継者の問題について研究されたことを出発点に、一方においては農村地域社会、農家について、特にその存立構造や存続可能性について内発的発展論も参照しつつ研究を進め、他方では中学生・高校生の進路選択と地域間移動に関する研究を、将来博士論文として集大成することを念頭におきながら進められた。博士課程に在学し研究を進めるかたわら、君は請われて日本で始めて認可・開設された通信制大学院4校の一つである明星大学大学院人文学研究科教育学専攻修士課程（通信制）のティーチング・アシスタントとなった。学部段階の通信教育では長い伝統を持つものの、大学院段階に関しては全く何も先例のない中で佐々井利夫通信教育課程長（当時）の下、他のT. A. とともに実務的なシステムの立ち上げに尽力するとともに、全国に居住する院生と教員や事務局との良き連絡窓口となり、院生の研究を助けた姿は修了生の間で今も語り継がれている。

しかし、着実に研究と教育の道を歩んでいた君に、病魔が忍び寄っていた。難病とされる病が発見され2000年12月、成田日赤病院に入院、長く苦しい闘病が続いたが、最新の医療と持ち前の強い意志で打ち勝った君は2001年6月には退院、2001年度後期にはいわき明星大学時代の森俊太教授のご縁で静岡文化芸術大学文化政策学部兼任講師として「地域社会論」の講義を担当するまでに回復された。2002年3月に明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程を単位取得退学されるのを待って、君には明星大学人文学部の兼任講師に就任してもらって、若き力を学生の教育・指導に発揮してもらったこととした。通学課程では「職業指導」「総合演習」を担当、君は「職業指導」の時間では講義科目

であるにもかかわらず単なる一方的な講義にとどめず、学生に発表させ、短文を記して提出させ、さらにそれを全員分自らワープロ打ちをして印刷配布し、次回の授業の材料にするなど工夫に富んだ学生参加型の授業を展開されていた。「総合演習」では人文学部とともに理工学部でも担当し、この科目の設置の主旨である学生自らが考える力を伸ばすことをめざして、さまざまな工夫を展開した。その努力が学生に強い印象を与えたであろうことは、二度目の入院の際に何名もの学生が遠く千葉県成田市の病院にまで見舞いに来てくれたことから推測される。通信教育課程でも「教育調査」「職業指導」「現代社会と社会教育」を担当、2003年夏のスクーリングでは「教育調査」の講義を担当し、君は自分よりも年上の学生も含む全国から集まった多様な学生を相手に工夫を重ねて講義を展開した。しかし、自らの研究を進めるとともに、教育・指導の面においても順調な出発を見せ、誰からも将来が囑望されていた君を不幸にも病魔は見逃してはくれていなかった。2002年12月には病気が再発、二つの病院で、現在考える最高の治療を受け、その苦しみに耐え抜き、闘い抜いた君であったが、2003年9月7日、君は再び帰ることのない旅へ、君を愛してやまなかったご両親や私達を残して旅立って行ってしまった。生まれ持った才能と、何よりも努力を惜しまない真摯な態度と強い意志を持った現代には稀な好青年に、天の神は嫉妬したのであろうか。残された今の私には「早い、あまりにも早すぎる別れであった」というほかは適切な贈る言葉さえ思い浮かばない。

泉館智寛さんの研究関心はきわめて広い範囲に及び、また研究者としての活躍が短期間であったこと、またテキストの刊行に際して請われて参加して多様なテーマについて執筆したことが

ら、かならずしも研究が体系化されたとはいいたいがたい傾向が強い。しかし、私の見るところでは、「中学生・高校生の進路選択と地域間移動」研究が将来博士論文として集大成することを視野に入れた中心テーマとなっていたと考えられる。このテーマに関しては、これまで「中学生・高校生の進路選択と地域間移動に関する研究（1）」「中学生・高校生の進路選択と地域間移動に関する研究（2）」「高校生の進路意識に関する研究（1）」の3論文が『明星大学研究紀要—人文学部—』第36号から第38号に連続して掲載されている。

この一連の研究は第二次世界大戦後の日本を対象として、中学校・高等学校を卒業した若年層が学校卒業を契機とする広域的な人の移動を見せることは産業構造・職業構造を中心とする地域社会の変動によって生じていること、他方においてそれが地域社会の変動を促進させる要因にもなってきたことを実証的に明らかにすることを全体的な研究の目的とするものである。第一論文では「中学校・高等学校を卒業した者が進路選択時にどのような地域間移動を行っているかについて、…（略）…データ分析を通じて明らかにすること…（略）…」、特に都道府県単位で時系列分析をすることを直接的な研究目的としているが、さらにそれを通じて地域社会を若年層の定着・移動という視点から考察し、地域社会と学校との関係をも明らかにしようとする意図を持つものと示されている。この研究では中学生については就職者が一定の数を占めていた1950年から1975年、高校生については主として1970年代以降が対象とされているが、高校生について分析された部分を見ると、進学率、進学にともなう地域間移動、就職率、就職者の産業別構成、就職にともなう地域間移動（県外就職率）の実態を明らかにした上で、就職にともなう地域間移動の多少の地域差とその地域差

を生じさせている要因について明らかにしている。その要因として、求人倍率・充足率、地域労働市場、初任給の地域差、主観的な移動促進・抑制要因、職業チャンスの問題が取りあげられているが、その内容を見ると必要な要因について過不足ない選択がなされており、各々の実証も手堅く行われていると評価して良い。第二論文では、第一論文で残された高等学校卒業生の性別、学科別の進路選択状況を分析するとともに、福島県を例に県内の地域別のデータ分析を行い、その地域別の特質を明らかにすることを研究の目的としている。福島県内の各公共職業安定所の管内ごとに集計・分析した部分は、第一論文からこの第二論文前半で展開された日本全国レベルでのマクロな研究を、よりミクロなレベルで実証した点で研究を一步深化させたものであり、県を越える地域間移動の状況が年代とともに変化していることが実証的に明らかになったという点で評価して良い。この第二論文の「7. 終わりに」では、次の課題として「次稿以降では福島県内の高校生を対象とする調査を実施して、進学・就職に伴う地域間移動の特質を明らかにしていきたいと考えている。」と記されているが、きわめて遺憾なことにこの時期に発病し、しばらく調査を実施することが困難な状況になってしまった。そこで第三論文では「…(略)…高校生の進路意識調査を企画・設計するにあたり、あらかじめ進路意識の分析枠組みを作る必要があった。」として、調査の前提となる進路意識の分析枠組みについて、先行研究の提示してきた諸理論を参照して、ミクロ的アプローチとマクロ的アプローチの両面から分析するモデルを提示することを一つの研究目的としている。その上で後半では調査のもう一つの前提となる福島県の実証的データについて検討することを研究目的としている。それらを総合して、「地域間移動について考える場合、

教育政策では入学定員や学校の配置が、また新規学卒労働市場では求人・求職状況がそれぞれ問題となること。特に求人・求職状況については、求人需要の多い大都市（東京都）と大都市へ学卒者を供給してきた地方（福島県）の双方から新規学卒市場について論じ…(略)…」ることが必要であると仮説的結論を示している。ここまでの準備が整い、自らも「本稿で提示した分析枠組に基づいて高校生の進路意識について実証的分析を行うことが次稿の課題である。」と記している。この論文を作成した2001年秋は一度目の入院加療を終えて退院した時期であり、更なる研究の進展を自ら展望していたであろうし、私はその完成をぜひ見届け、完成した論文を読みたかったと思う。それが実現せず、一連の研究が未完に終わったことに対して、今の私には悔やむ以外になすすべを知らない。

泉館智寛さん、敢えて何度も繰り返すように、早い、あまりにも早すぎる別れであった。君のきわめて真摯で旺盛な研究関心は最後の最後まで変わることはなかった。二度にわたる入院中何度か見舞わせてもらった私に語る内容はほとんどが退院後の研究計画、論文の構想、そして講義の構想であった。君自身が「あまり間もおかずすぐに手紙を書くのは、まるでかつての女学生のようなのですが」と記すほど、入院中にしばしば交わした手紙の中でもその時々を読んだ本に対する考え、研究や論文の構想が記され、そして私が「近いうちに〇〇のテキストの改訂を考えないといけない」と一言記せば、たちまちその著書の構想を提示してきた君であった。今は最後になってしまった二度目の入院、移植の直前の手紙でも自宅外泊から持ち帰って読んだ本の感想が記され、病院の近くに県立図書館があり資料収集に苦労しない環境に喜んでいること（しかし、実際にはこの当時自由に外出する

ことはできず、永遠にできなくなってしまった  
 のであるが…) が記され、さらに演習科目の改  
 革について記されていた。そんな君の手紙に対  
 して、私にはいつも「退院して元気になったら…」  
 と返事するしかなかったが、それも今はかなわ  
 ぬ願いとなってしまった。幽明世界を異にし、  
 白玉楼中に住もうとも、時間の制約のない世界

で心ゆくまで研究に励まれ、願っていた成果を  
 あげられることを祈って、君に贈る言葉とさせ  
 ていただきたい。

合掌

(2003年11月)

(たかしま ひでき、本学科教授)

## 泉館智寛講師 略年譜

- 1972 (昭和47) 年 2 月 4 日 千葉県佐倉市生まれ
- 1990 (平成 2) 年 3 月 千葉県立佐倉高等学校 卒業
- 1990 (平成 2) 年 4 月 明星大学人文学部社会学科 入学
- 1994 (平成 6) 年 3 月 同上 卒業 [学士 (社会学)]
- 1994 (平成 6) 年 4 月 秋田大学大学院教育学研究科教科教育専攻修士課程 入学
- 1996 (平成 8) 年 3 月 同上 修了 [修士 (教育学)]
- 1996 (平成 8) 年 4 月 いわき明星大学人文学部助手
- 1999 (平成11) 年 3 月 同上 退職
- 1999 (平成11) 年 4 月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程 入学
- 1999 (平成11) 年 4 月 明星大学通信制大学院 嘱託助手 (至2001年 3 月)
- 2001 (平成13) 年 4 月 静岡文化芸術大学文化政策学部非常勤講師 (至2003年 3 月)  
 [地域社会論 担当]
- 2002 (平成14) 年 3 月 明星大学大学院人文学研究科社会学専攻博士課程 単位取得 退学
- 2002 (平成14) 年 4 月 明星大学人文学部兼任講師 (至2003年 3 月)  
 [人文学部=職業指導・総合演習 担当]  
 [通信教育課程=教育調査・職業指導・現代社会と社会教育/教育  
 調査 (スクーリング講義) 担当]  
 [理工学部=総合演習 担当]
- 2003 (平成15) 年 9 月 7 日 逝去 (享年 31歳)

学会所属 日本社会学会  
 日本村落研究学会

## 泉館智寛講師 著作目録

| 著書・論文名                      | 発表年月           | 発表誌名・発行所等                                  |
|-----------------------------|----------------|--|
| 農家継承の論理と地域農業構造              | 1996（平成8）年3月   | 修士論文（秋田大学）                                 |
| 秋田県果樹地帯における農家継承             | 1996（平成8）年     | 日本村落研究学会発表                                 |
| 阿武隈山系村落の変容                  | 1998（平成10）年3月  | 『いわき明星大学人文学部研究紀要』第11号                      |
| 『農業の担い手問題に関する一考察』           | 1998（平成10）年3月  | いわき未来づくりセンター（自主調査研究No. 6）                  |
|                             |                | （『いわきの未来を考える シリーズ1. 農業再生は可能か』1999年10月 に再録） |
| 中学生・高校生の進路選択と地域間移動に関する研究（1） | 2000（平成12）年3月  | 『明星大学研究紀要—人文学部—』第36号                       |
| 内発的発展論に関するノート（1）            | 2000（平成12）年3月  | 『明星大学社会学研究紀要』第20号                          |
| 農業経営の存立構造                   | 2000（平成12）年5月  | 『明星大学社会学研究報告』第21号                          |
| 中学生・高校生の進路選択と地域間移動に関する研究（2） | 2001（平成13）年3月  | 『明星大学研究紀要—人文学部—』第37号                       |
| 高校生の進路意識に関する研究（1）           | 2002（平成14）年3月  | 『明星大学研究紀要—人文学部—』第38号                       |
| 公立学校も選択される時代に—通学区域の自由化—     | 2002（平成14）年10月 |  |
|                             |                | 住田正樹・高島秀樹編『子どもの発達と現代社会—教育社会学講義—』北樹出版       |
| 国際化と社会教育の課題                 | 2003（平成15）年2月  | 高島秀樹・神山敬章編『社会教育の現代的課題』明星大学出版部              |
| 地域づくりと社会教育                  | 2003（平成15）年2月  | 高島秀樹・神山敬章編『社会教育の現代的課題』明星大学出版部              |